

体育学における価値論議の可能性と その集約点

—Spranger, E. の教育学を中心として—

阿部 悟 郎

- 〈目次〉
1. 序 論
 2. 本 論
 - 2.1. Spranger, E. の教育学とその価値論議
 - 2.2. 教育学における価値論議としての陶冶価値論と価値体験
 - 2.3. 体育学における価値論議の可能性と、その可能性の一形式
 - 2.4. 体育学における価値論議と、そこに映ずる人間の身体
 3. 結 語
 4. 註および引用・参考文献一覧

1. 序 論

体育学が体育の本質を問い、それを教育という視座から照射していくと、いくつかの学的課題が照らし出されていく。価値の問題もその一つであり、体育学が体育を厳密に論じていく上では、不可避な課題の一つとして数えられることであろう。そもそも、価値論 Axiologie は、哲学の一部門である⁽¹⁾。そして、それは認識論や論理学とならんで哲学的営為の一方向であるがために、体育学においてもその哲学的営為の確かな一方向として捉えられることとなろう⁽²⁾。ところが、体育学において、それを直接的に取り上げ、その本質に切り込んでいくような営為は必ずしも活発であったとは言い難い。従って、体育学が価値論議を立ち上げようとするならば、何よりも先ずは関連領域に有効な知見を求め、そこに学ぶことから始めなくてはならない。ところが、価値それ自体についての本質論議は、思想の歴史を顧みても、あまりに多種多様であるという⁽³⁾。それでは、体育学はいかなる価値論議にその礎を求めべきであろうか。ここでは、体育学における価値論議は、相応に、教育学における価値論議に類比的であるように思われるため、さしあたり、教育学において展開された価値論議に目を向けてみたい。

さて、おそらく教育学においても、価値に関する論議が古くからあった筈である。ところが、教育学においても、それが難解であるが故に、それを避けたり途中で停止したりすることが多いようである⁽⁴⁾。加えて、教育学における価値論の事情を繙くと、教育学における内在的価値説の本質的誤謬についての次のような指摘⁽⁵⁾が映じてくる。即ち、社会・文化の領域で仮に価値の序列体系が崩れかかっても、またあるいは政治や経済が、教育に勝手な価値観を押しつけてくる時なども、『教育にはそれ固有の内在的な価値がある』と主張するのは確かに魅力的ではあるが、実は、教育学において教育それ自体に内在するそのような独自で固有な価値を特定するのは極めて困難である。そして、教育学における価値論議において、それを正しく模索するところに

において逃避しがちな、あの苦し紛れの『教育は価値あるものの伝達である』といった主張は、その根底的論議の無批判な自明性を前提した、ただのトートロジー tautology に陥っていることに気づかされるという。これらを想い併せるならば、教育学において価値を問い、それを主題的に論じていこうとするとき、そこには一定の慎重さが要請されるように思われる。おそらく、それは体育学における価値論議にも妥当することであろう。

このような事情を踏まえつつ、改めて教育学における価値論の凡そを概観すると、有効な論議が無数にあるなかで、例えば Spranger, E. や Peters, R. S. らの名が挙げられている。そこで、本稿においては、体育学における価値論に焦点をあて、その予備的検討の端緒として、Spranger, E. の価値論議に基づいて、体育学における価値論の可能性の一端を探っていきたい。

2. 本 論

2.1. Spranger, E. の教育学とその価値論議

Spranger, E. (1882-1963)⁽⁷⁾ は、ドイツ教育学における精神科学的教育学を代表するのみならず、ドイツ教育学、ひいては、いわゆる現代教育学においても最高位に位置づけられている。⁽⁸⁾ 周知の通り、Spranger, E. は、その人間学的思考を基盤として多岐にわたる学的成果を生み出してきた。その価値論もその一つと数えられてよいだろう。

まず、Spranger, E. の価値に関する論議は、例えば、価値の相対主義批判や実証主義批判等の論争等に華やかであるが、それらは雑駁に言えば、教育学領域を超えた精神科学的立場からの対抗的な発信であったと言えよう。そうではあっても、彼の価値理論は、相応の学的评价を得ているように思われる。例えば、彼の代表的な著作の一つである『Lebensformen (1922)』は、西南ドイツ学派の完成者として価値論的文化哲学を確立した、あの Rickert, H. (1863-1936) によって、「実質的には価値の哲学である」と評されている

という。⁽¹⁰⁾そこで、Spranger, E. の価値論議の凡そを辿ってみたい。

さて、Spranger, E. は、その価値論議において、価値それ自体については、どのように論じていたのであろうか。確かに彼の著作には「価値 Wert」なる用語が随所に頻発する。ところが、そこにはそれについての明確な定義や立場表明は、あまり多くないように思われる。Spranger, E. は次のように述べる；

「価値というものは、対自的 für sich に根源的な像 Urbilden や形式 Formen などではない。それどころか、価値とは、むしろ常にただ体験する主体が、体験される、あるいは体験可能な対象連関と向かい合っているところにおいてのみ、⁽¹¹⁾煌めくのである。」

まず、Spranger, E. は、価値を主体に対峙する超然とした超越的な構成態としてではなく、主体と対象との関係から捉えようとする。このような立場は、おそらく19世紀後半の新カント学派によってなされた、それまでの価値理論における無批判な形而上学的論議の排撃という流れの上にあるように⁽¹²⁾思われる。また、Spranger, E. は次のようにも述べる；

『『価値』それ自身が、現実を遙かに超えた彼岸の理念上の系列の中に（超然と）存在するということは、全く考えられない。なぜならば、価値とは、常に関係概念 Relationsbegriff なのである。価値は主体と対象との関係を表現する。それ故に、価値それ自体よりも、価値の妥当性 Gelten の方が問題となる。なぜならば、妥当性という考え方の中には、常に『ある主体に妥当する』ということが含まれているからである。また、真理それ自体という場合にも、類似であろう。真理もまた本来決して天界に超然と独立的に存在するものではなくて、ある方向において熟慮し判断する主体に妥当するものである。価値にせよ真理にせよ、問題となるものは、方法上の限界概念あるいは理念である。真理の場合は、あらゆる真理に相関する主体の理念が、そして価値の場合は、あらゆる真正な諸価値に相関する主体の理念が問題となる。これら両者の理念は、共に超驗的 transzendent である。ここにあっては、我々は何やら完成された真理についても絶対的価値についても何ら知り及ぶことはない。その上、

絶対的価値なるものは、それ自体に矛盾を含んでいる。なぜならば、価値がある関係の表現であるということは、価値の概念に含まれているので、客観的価値は存在するにせよ、(少なくとも概念的に正当な理論においては)絶対的価値などありようもない。そのような絶対的価値についての思慮などは、(いわゆる)宗教に属するものである。⁽¹³⁾

実に、これによるならば、価値は、それ自体、彼方の観念界に超然と住まうものではない。即ち、Spranger, E. は、価値を彼岸の遙か彼方に独立的に存在するものとは考えず、むしろ関係概念として、即ち、価値それ自体の存在よりも主体への妥当性から捉えようとしたのである。従って、彼は、それを対象的構成態が主体に対して意味するところのものの言語的な表現とも考えるのである。⁽¹⁴⁾ 確かに、その「関係」という問題もそして「妥当」という問題も、新カント学派以降の価値論議においては重要な視座の一つであったようである。⁽¹⁵⁾ なるほど、それは超驗的であるが、絶対的なものとして無批判にそして観想的に仰がれるようなものではない。そして、それはむしろ主体との関係においてのみ生起するものかもしれない。

そこで、Spranger, E. は、価値を、その表現の多義性から構造的に整理を試み、次の三形式から捉えた。⁽¹⁶⁾ まず第一に、「価値本質 Wertwesenheit」であり、それは質的に規定された普遍的な価値種類 Wertgattung である。第二に、「価値対象 Wertgegenstand」であり、普遍的な価値が現実的に具象化された具体的構成態である。そして第三に、「価値体験 Werterlebnis」であり、体験における普遍的な価値の本質が人格的に享受・実現されたものである。即ち、質的に規定された普遍的な「価値本質」が、その具体的構成態としての「価値対象」を媒介として、その固有の本質が「体験」されることで、現実的なものとして人格的に実現されていく。それは超驗的次元から人格的次元へと至る重層的構造と言える。約言するならば、価値とは、ある普遍的な諸形式の超驗的実在を前提として、その具体的な構造態としての客観的形式、そしてその体験を通じて享受・実現された人格的形式に区分されることとなる。

従って、Spranger, E. は、全ての価値の本質は、常に体験の中でのみ現れるという立場をとる。即ち、体験する主体においてこそ、価値本質はようやく現実のもの *gegenwärtig sein* となるのである⁽¹⁷⁾。つまり、価値は固定した本質性として超主観的な領域にあるのではなく、常に人格的な精神構造の中にある⁽¹⁸⁾。これらから、Spranger, E. の価値理論は、そこに超驗的な本質層を設定しつつも、常に体験という現世の人格的現実性に焦点化しているという点で、極めて人格主義的であるように思われる。

2.2. 教育学における価値論議としての陶冶価値論と価値体験

さて、価値一般がそうであるとしても、教育学が果たしてそれを無批判に受容し得るかどうかは、一考を要する。つまり価値一般がいかにあろうとも、それが人間形成 *Bildung* に有効に関わり得ないとすれば、教育にとって裨益するところがないからである⁽²⁰⁾。そこで Spranger, E. は、そのような人間形成に対して有効な価値を陶冶価値 *Bildungswert* と呼んだ⁽²¹⁾。ところが、実際、全ての価値は何れのものも、必ずしも陶冶価値があるとは限らない⁽²²⁾。Spranger, E. は次のように述べる；

「あれらの価値一般の僅かな断片のみが、その時代に現実的なものとして活動する、つまり、実際に人間に価値として体験され、そして認められる。そして、その中でもなお僅かな断片のみが、陶冶価値の領域に妥当する。なぜならば、陶冶価値は、ただそれが属する価値種の固有の本質に規定されるのみならず、むしろ、それと同時に、自己発展的な（途上の）人間、そして完成に至りつつあるような（年長の）人間に対する意義によって規定されているのである。」⁽²³⁾

従って、陶冶価値は、その根源的な価値種の本質のみならず、人間形成に対する実り豊かな有意義性 *fruchtbare Bedeutsamkeit* によって選定される⁽²⁴⁾。価値一般が教育事象を超えて存在するにせよ、それが教育において陶冶価値

として機能するのは、やはりその一部に過ぎないのである。これによって、教育学における価値論議は、改めて陶冶価値を第一の注視対象とすることとなる。このようにして、価値論は、教育学においては陶冶価値論として再構成され、教育学における重要部門となつていったのである。⁽²⁵⁾

さて、教育学における価値論議の注視対象である陶冶価値も、それが理念として超驗的であるとしても、それが決して死して到達するような彼岸の彼方にあるのではない。それは、むしろ体験 Erlebnis を通じて現実のものとなり、それがその固有の有意義性をもって、人間形成へと参入することとなる。Spranger, E. は次のように述べる；

「『体験』、それは自発的な、あるいは意味付与的な行為に対応する、受容的なあるいは意味充實的な行為である。体験において、歴史的な所与の精神的構成態を通じて、超個人的な意義に出会う。また、体験において、『わたし』が自らの現実に応じて、その意義を翻訳する。また、『わたし』が他者の話を理解すること、『わたし』が芸術作品を娛しむこと、『わたし』が運命の中に神の御手を見出すこと、『わたし』が他によって愛されること、これが即ち体験である。」⁽²⁶⁾

人間は、日常においても多様な構成態と出会い、そこで体験を通じて価値の本質を独自の形式で翻訳することができる。やはり教育学においても、価値は単なる観想の対象ではなく、体験の対象である。人間は、体験なくして価値を受容することができない。そこで、Spranger, E. は、そのような価値の内なる体験を特定し、価値体験 Werterlebnis と称するのである。⁽²⁷⁾

さて、人間は、価値体験において価値を翻訳的に受容し得るが、そこにおいて受容された価値は、その固有の有意義性をもって人間形成へと参入していく。即ち、価値体験は、何らかの形で意味付与的 sinngebend にその存在を照らし出し、それが些末なものであっても、精神の本質の形成に、意味付与的に作用する。⁽²⁸⁾そして、価値体験におけるその内容の全ては、個々の生の全体的意義に影響するのである。⁽²⁹⁾それ故に、人間は、これによってますます

多くの客観的価値を受け入れ、それによって自身に大きな内的充実と多様性を与えることができる。⁽³⁰⁾そして、それがその存在の価値全体に対して意味するところが多ければ、それだけ生の連関の全体において、人間存在の核がより高次なものとなるのである。⁽³¹⁾即ち、価値体験は、価値の単なる翻訳的享受に留まることなく、人格形成上、極めて有効でそして生産的な契機となる。従って、価値体験は、価値と人間形成を取り結ぶ接合点のようなものと言えよう。

ところで、人間は、価値体験において価値を受容し、それによって自らの存在の核を豊かに耕しゆくが、価値それ自体は、外より内へ入り来たるとしても、その内に深く沈みゆき、やがて暗黒の無へと帰するわけではない。なるほど、価値はまず超驗的に主体の外部にあり、やがて価値経験によって主体の内部へと受容されゆく。ところが、価値は、やがて自らの内なる深まりから世界に対して独自の具体的な形をもって造り出されていくのである。⁽³²⁾即ち、全ての価値は、やがて心の土壤に生まれ出でる。それ故に、Spranger, E. は、価値体験を、内的な創造 innerlich Produktion と呼ぶのである。⁽³⁴⁾ 実に、価値というものは、⁽³³⁾ 不断の価値体験によって、個人的に創造していくものである。⁽³⁵⁾ 従って、価値の受容者は、最後には自らがそれを生み出さなくてはならない。⁽³⁶⁾ 人間は、価値を受容するのみにとどまらず、内界のある部分を独自の形式で創造し、それを具象世界に対して与えることによって、⁽³⁷⁾ 価値を人格的に表現するのである。

従って、価値は、価値体験によって受容され、人間のうちに入りゆきながら、やがてあのような創造と表現を通じて、やがて世界へと還元されていく。そして、このような価値表現は、価値の新たな客観的形式としてその存在を主張し、改めて受容の対象として個人へと迫りゆく。より良き形式、より豊かな形式を求めて、価値は受容・創造・表現を繰り返し、文化の向上を促進していく。価値は、受容と表現的な還元を繰り返しながら、向上的に循環するのである。このような意味において、やはり、人間は価値受容、享受のみならず、価値創造そして価値実現・表現の主体と、そして価値の創造的

循環の場であるとさえ言えるように思われる。それ故に、価値体験は、教育的有効性のみならず文化的有効性をも併せ持つのである。

ところが、そのような価値体験は、決して全く特異な出来事であるとは言いきれない。考えてみると、人間は、時の流れや、押し寄せてくる運命の中で、常に新たな価値体験に巻き込まれる。ただ、それらは、決して甘美なものばかりではない。人間は、誰しもが、その存在の内にそれまで生み育ててきた独自の価値世界を持ちながら、現実の世界に価値の人格態として峻立する。そして、現実の荒波においては、そこに絶えず対決を迫り来るものもある。時としてそれが価値的な闘争を引き起こすこともある。とりわけ、若者の可能性の豊かさは、逆説的には価値の内的欠乏を意味し、それ故に、往々にして価値的な葛藤に晒されるが、これを正しく経ることによって、彼特有の精神的な生産過程が生じてくるのである。即ち、価値体験の契機は順風な暖かさにもみある訳ではなく、寒風や荒嵐の厳しさの中にさえもある。つまり、生の苦しい闘いにおいてのみ内的な克服が得られ、それが自らの真なる高次な可能性へと導いてくれるのである。Spranger, E. は次のように述べる；

「成熟の背後には、常に克服がある。苦闘の中での責めに与ることなしに、克服はあり得ない。そのような内的な格闘には、いずれにせよ『これはできない』、『あれは許されぬ』といった悲劇的な苦難がある。我々をより高い価値段階に高めてくれる苦難の正当な弁神論が、ここに存在する。人間は、苦難なしては浅薄なままにとどまるであろう。苦難は、人間に深みを与えてくれるのである。」

やはり、自らの内に価値を生み育てるためには、そこを耕す労苦を避けることができない。自らをより豊かに高めゆくためには、ある時は危機に陥り、ある時はそれに打ち克つような、こころを揺さぶり動かす激しい体験に身を置くことも必要となる。より高き価値世界の構築のためには、それまで堪え残ってきた内的価値世界を破壊するような激しい闘争を迎えなくてはな

らないのである。⁽⁴⁵⁾ そのような内的格闘によって不断の実証と自己修正が為され、人格的価値世界 persönliche Wertwelt が次第に確かなものへと築きあげられていくのである。⁽⁴⁶⁾

Spranger, E. は、そのような価値形成的な労苦を金坑の苦闘に喩える。⁽⁴⁷⁾ 鉱脈を探しあて、その真なる鉱石を求め、そこを掘り進む労苦は、決して安易なものではない。時に鉱脈を求めて右往左往しながら、時に岩盤の堅強さに辟易しながら掘り進む。そして、そこまで辿った抗路は、真の金鉱脈への到達によってようやく正当なものとなるであろう。即ち、真なる価値を獲得するには、相応の労苦と努力が必要なのである。そして、価値世界の内的構築は、決して直線的に進行することなく、定められた航路を持たず、時に彷徨い、時に押し迫る価値と格闘しながら、それでもその過程の一つ一つを正しく克服することによって、いわば螺旋的に個性化の道を辿っていくのである。⁽⁴⁸⁾ 換言するならば、価値格闘の道は独力で歩むが故に、そこに至る過程も独自のものであり、その果てに到達した価値世界もやはり独自のものである。そして、それが人格形成的な力となるのである。⁽⁴⁹⁾

従って、誰しものが、自らのもの以外の価値格闘の道を歩むことはできない。そして、誰しものが、自らのもの以外の価値世界を持つことができない。可能性はやがて独自性へと進みゆくのである。実に、内なる価値形成が進行するにつれ、人格的価値世界は、一面的な個性化の道を辿っていく。そのためには、その可能性とともに世界の前に立ち、自らの器を純粹に保ちつつ、その労苦すら受け入れることが求められる。そう、『運命を充実する人には、苦しみも歓喜も微笑みかけてくれる』。⁽⁵¹⁾ 確かに戦いは苦しく、努力はつらい。もちろん、そこでは逃避することも無関心を決め込むことも許されることであろう。そうではあっても、そこを超えなくては先へは進めない。なぜならば、歓喜に、そして労苦にさえも価値契機は存するからである。否、人間のいかなる生の断面にも、それぞれの価値契機が何らかの形で含まれている。⁽⁵²⁾ 従って、いかに些末なことにさえも、人間の生の全体的意味と全体的価値にとって、重要でないものはないのである。⁽⁵³⁾ だからこそ、人間は、その価値形

成の道程において迫り来るものに対しては、まずは純粹にそれを受け入れ、そこに身を投じ、そこで苦しくも努めなくてはならない。なぜならば、その果てにこそ、その先の道程が啓かれてくるからである。Spranger, E. は次のように述べる；

「救い Erlösung とは、既にありそこで到達しているような何かに対する瞑想的な帰依にあるのではなく、寧ろ努めての努力にこそある。恩寵 Gnade は、(自ら) 努めるものにこそ来たるだろう。自ら努めゆくもののみが神性の顕現に与り得る。しかしながら、(自ら努めゆかない) 受動的なものは、神性の降臨を幾分不用意に、そして幾分不完全に受け取ることであろう⁽⁵⁴⁾」

価値と戦い、価値をつくりあげていくそのような道程がやがて神の領野へと至るとしても、それは神が一方向的に誘い授ける道ではなく、自らの努力によって苦しみつつも前へと進みゆく道なのである。神の恩寵を無思慮に欲するものではなく、敬虔にそして純粹に努めを重ねゆくものに、神は微笑みかけてくれる。大切なことは、自らが求め、それを苦しくも努めることである。そして、自らの存在とその生成に対して正しい意味において積極的であることが求められる。なぜならば、その先にこそ豊かさや価値が可能性として保障されているからである。Spranger, E. は述べる；

「それは常に道の途上にあり、それはまさに憧憬とそして秘めたる希望と共にある。⁽⁵⁵⁾」

即ち、それはまさに価値創造的に進みゆく遙かなる道程である。ここから、人間は、常に豊かさや充実を求める価値形成の道程にあり、独力で、そして自らの努力で、一步一步そこを前進的に歩みゆき、そのうちなる人格的価値世界を豊かに耕しながら、神性の領野へ向かって歩み進むことを想い至らせられる。なるほど、人間は、その存在において、極めて豊かな可能性の前に立っているとと言えるのである。⁽⁵⁶⁾ この意味において、Spranger, E. は、人

間存在の本質とその生を価値可能性 Wertmöglichkeiten⁶⁷⁾とみるのである。

実に、Spranger, E. は、このような人間形成論、即ち、価値創造的に進みゆく生成の道程というストーリーを描き出す。そして、教育学における価値論議は、このような人間形成論においてこそ、相互の有機的な位置づけと機能連関を獲得し得ることであろう。この意味においては、人間形成論は、教育学における価値論議の確かな集約点であると言えよう。実に、彼の教育学における価値論議は、このような人間形成論を基底とすることによって、正しく学理論的有効性を確保し得るのではないだろうか。そうであるならば、ここに教育学における価値論議の可能性の一端をみることができるように思われる。

2.3. 体育学における価値論議の可能性と、その可能性の一形式

体育学における価値論議の可能性の一つには、Spranger, E. に従い、体育的陶冶価値論として語られる方向があるだろう。価値一般が体育事象を超えて存在するにせよ、全ての価値が必ずしも体育的陶冶価値を有するわけではない。体育学的な人間形成に一定の意義をもって算入され得る価値形式こそが、体育的陶冶価値となり得るように思われる。従って、それは、その根源的な価値種の本質のみならず、体育における人間形成に対する実り豊かな有意義性によって選定されていく。これによって、体育学における価値論議は、改めて体育的陶冶価値を第一の注視対象とすることとなる。

さて、体育学における価値論議が、Spranger, E. に従い、さしあたり体育的陶冶価値論として立ち現れてくるとすれば、そのような体育的価値の諸形式は、どのように人間形成に参入していくのかが問われることであろう。おそらく、そのような体育的陶冶価値も、やはり理念として超驗的であるにせよ、その本質は、常に体験の中にのみ現れるはずである。そして、それらは体験を通じてこそ、その固有の有意義性をもって、人間形成へと参入していくことであろう。そうであるならば、ここでも、Spranger, E. の価値体験と

いう考え方が、体育的陶冶価値と人間形成を取り結ぶ有効な接合点となるように思われる。そこで、Spranger, E. の価値論議、とりわけ価値体験という視座に基づいて、体育学における価値論議の一形式を素描してみたい。

まず、体育事象においても、あらゆるところに価値契機が可能性として秘められていることであろう。そして、体育の具体的・現実的な状況において、人間は多様な価値体験に巻き込まれてゆく。体育において人間は、動く中で、多様な運動の中で具体的構成態としての価値対象と関わり、その直接体験を通じて、価値の本質をその自己の現実 に即して翻訳することによって独自の形式で受容し、そして享受し、自らのうちなる価値世界をより豊かに耕してゆくことができる。おそらく体育においても、価値体験は、その意味付与的な作用により、人間存在の核をより高次なものに耕し、存在形成の可能性をより豊かに高めてゆくように思われる。そうであるならば、体育における価値体験も、それが単なる価値の刹那的な受容にとどまらない、実に、人間形成上、極めて有効な契機となっていくことであろう。

ただし、体育におけるそのような価値体験も、その全てが甘美なものばかりではないように思われる。体育においても、やはり、生の苦しい闘いにおいてのみ内的な克服が得られ、それが自らの真なる高次な可能性へと導いてくれるのではないだろうか。従って、体育におけるさまざまな苦難やそれを克服する努力も、やがては人間をより高い価値段階に高めてくれることであろう。即ち、体育においてさえも、陶冶価値の契機は、順風な暖かさのみあるわけではなく、寒風や荒嵐の厳しさの中にさえもある。それ故に、体育において、人間はその可能性とともに世界の前に立ち、自らの器を純粹に保ちつつ、その労苦すら受け入れ、そこに身を投じ、そこで苦しくも努めゆくことが求められる。なぜならば、体育においても、その先にこそ豊かさや価値が可能性として保障されているからである。従って、体育においても、努力の果てにこそ、その先の道程が啓かれてくるのである。やはり、体育という注視方向においても、『自ら努めゆくもののみが神性の顕現に与り得る。』そして『運命を充実する人には苦しみも歓喜も微笑みかけてくれる。』体育

においても、歓喜に、そして労苦にさえも価値契機は存するのである。それ故に、体育においても、人間は自らの存在とその生成に対して正しい意味において積極的であることが求められるのである。

従って、体育においても、価値世界の内的構築は、決して直線的に進行することなく、定められた航路を持たず、時にさまよい、時に押し迫る運命において格闘しながら、それでもその過程の一つひとつを正しく克服することによって、いわば螺旋的に個性化の道を辿っていくのである。そして、誰しもが、自らのもの以外の価値格闘の道を歩むことはできない。そして、誰しもが、自らのもの以外の価値世界を持つことができない。換言するならば、価値格闘の道は独力で歩むが故に、そこに辿る過程も独自のものであり、その果てに到達した価値世界もやはり独自のものである。やはり、体育学における価値論議からみても、可能性はやがて独自性へと進みゆくように語られることとなる。

これによって、体育においても、なお人間は、常に豊かさや充実を求める価値形成の道程にあり、独力で、そして自らの努力で、一步一步そこを前進的に歩みゆき、そのうちなる人格的価値世界を豊かに耕しながら、神性の領野へと向かって歩み進むことを想い至らせられる。なるほど、体育においても、なお人間はその存在において、極めて豊かな可能性の前に立っている。そうであるならば、体育という注視方向においても、人間存在の本質とその生を価値可能性とみることができよう。Spranger, E.に導かれてきた、このような体育学的な人間形成のストーリーは、些か叙情的なファンタジーであるかもしれないが、体育学における価値論議に対しては、確かな基底を与えてくれる。体育学における価値論議も、このような人間形成論と緊密な連関を得ることによって、一定の学理論的な有効性を確保し得るように思われる。やはり、体育学における価値論議は、たとえどのような形式をとったにせよ、最終的には人間形成論においてこそ、相互の有機的な位置づけと機能連関を獲得し得る。この意味において、体育学における価値論議の集約点も、やはり体育学的人間形成論にあるのではないだろうか。このような方向

において、体育学における価値論議の、その広汎な可能性の一端をみる事ができるように思われる。

2.4. 体育学における価値論議と、そこに映ずる人間の身体

さて、体育における価値論議が、あのような人間形成論と緊密に関連することによって有効性を得るとしても、体育における価値体験の現実には、凡その場合、人間の身体（58）がその舞台となる。このことを、幾分、拡大的に思念した時、体育学はその価値論議において身体をどのように語り得るのであるか。

体育における価値体験が、凡その場合、身体的な直接体験の中に生起するとすれば、体育学は人間の身体、少なくとも体育事象に立ち現れる人間の身体については、顧慮に値する重要な契機となるように思われる。実際、体育において人間は自らの身体を媒介としてスポーツ等の身体文化の諸形式を内面化することで、その価値本質を独自の形式において受容・享受し、それを新たな独自の形式で身体的に創造・実現し、世界に向けて表現していくことができよう。例えば、苦闘の果てに得た勝利に、深奥から湧き起こる歓喜が身体を貫く。惜敗にさえも絶望のあとにゆるしや救いが降臨し、身体にはその最奥より新たな価値が芽生えてくるのではないだろうか。苦しくも繋いだパスが得点に結びついた時、身体で連帯的充実を覚えるのではないだろうか。ライバルとの拮抗した争いにおいて、それまで秘められていて知り得なかった新たな価値形式がその身体に引き出されていくこともあろう。素晴らしい達成や美しい舞いは、身体の内にも育まれた独自の価値形式の身体的実現・表現に他ならないように思われる。ようやく到達した山頂からの眺望は、多くの価値を引き連れて身体へと染み入ることであろう。また、観戦等の二次的な参与においても、崇高な達成や良き戦いには、身体の芯から熱くなるような感動を覚えざるを得ない。それらの何れのものも有効な価値体験として、その価値固有の本質が独自の形式で、人間の身体に価値形成的に刻

み込まれていくのではないだろうか。

そのように考えてくれば、体育における人間の身体は、価値受容・享受のみならず、価値創造そして価値実現・価値表現の主体として、一定の制約のもとで、身体を論じることも可能であるかもしれない。約言するならば、このような視座のもとでは、体育における人間の身体は、その基底において生物学的合目的性に規定されつつも、その人間学的本質は、常に価値に開かれており、そこにおいて価値を受容し、それを享受し、そこにおいて新たな価値を創造し、そしてそれを実現・表現していく主体であるように思われる。それ故に、体育における人間の身体は、その価値論議の照射のもとでは、生物学的合目的性を遙かに超えた身体、即ち価値に開かれた身体と言い換えることもできよう。または、Spranger, E. の表現に従って、体育における身体も、ある特定次元を想定して、価値可能性とみることさえ許されるかもしれない。

そうであるならば、体育における人間の身体は、主体の豊かな高まりへ直接的に繋がるルートと、創造・表現を通じて文化向上へ寄与するルートとを併せ持つこととなる。即ち、価値形成的に耕された身体は、それ自体が人間の価値的形成へと繋がってゆくとともに、そこから新たな独自の価値を創造し、表現することによって、世界に新たな独自の客観的形式を与え、改めて人間に対して価値体験を迫る。より良い形式、より豊かな形式を求めて、価値は身体をその場として受容・創造・表現を繰り返しながら向上的に循環してゆく。そして、より高次に高まった客観的形式は、新たな価値体験において人間をより豊かに耕してくれることであろう。

従って、体育における身体、即ち、価値に開かれた身体においては、価値形成的に耕されていく直線的な幹線に、価値受容・創造・表現の螺旋的循環が複雑に絡み合っているのではないだろうか。そうであるならば、そのような身体論議、即ち、価値に開かれた身体という視点は、体育学における価値論議の独自の方向を示唆しているかもしれない。さらには、体育学における価値論議は、このような身体論議を媒介とすることによって、独自の視野を

獲得し得るように思われる。そして、体育学における人間形成論が、このような身体論議を正しく包摂するならば、より豊かなストーリーを語り得るのではないだろうか。体育的陶冶価値がそこに集約し、そのような人間形成論における適正な位置づけと連関を内的に構築することによって、体育学における価値論議は、ようやく体育学における確かな領域を形成し得るはずである。

3. 結 語

体育学における価値論議がどのような方向をとるにせよ、それはやがて人間形成論に集約することによって、学理論的な有効性を確保し得る。従って、体育学における価値論の可能性の一つとしての、体育的陶冶価値論も、体育学的人間形成論への内的求心性を有する。しかしながら、それがまさに一般価値論等に派生的関係を有する内在的価値論の一形式であることからすれば、そこには一般性・普遍性を希求する方向も認められるはずである。従って、そこに求められるのは、学理論としての完全な独立性と内的完結性ではなく、むしろ一般価値論やスポーツ哲学的価値論等に対する開放性ではないだろうか。これによって、体育学における価値論議は、自閉的な論議に窮することなく、外部との適正な批判関係を獲得し、さらには、外部の知的成果を体育学的注視方向から有効に利用し、その学的内実を拡充していくことも可能となろう。

これらから、体育学における価値論議もその学理論的確立に向けて、さしあたり次の手順を踏むように思われる；

- ①一般価値論あるいは他領域の価値論議の批判的受容と、それに対する体育学的承認
- ②体育的陶冶価値の吟味と人間形成論における内的連関の検討・整備
- ③体育学的陶冶価値の内的体系化と一般価値論、あるいはスポーツ哲学的価値論との学理論的相互批判関係の整序

これを段階的に経ることによって、体育学における価値論議は、価値論としての学領域を形成し、体育学において正当な位置づけを得ることができると。そして、体育学はこのような価値論という接合点を介して、人間形成論に立脚しながら、一般価値論や他領域の価値論議と、およそ対等に論議を交わすことができるように思われる。Spranger, E. の語った価値論は、その教育学的な一方向である陶冶価値論に限局して言えば、根無し草のような浮遊感ではなく、むしろ確かな大地に根ざす安定性を思わせる。また、それが一点に収斂する狭隘さを感じ得るというよりは、むしろ機能概念である教育の根本的動因に対する適合性を思わせる。ただし、これは教育学における価値論議の可能性の単なる一方向であるに過ぎないかもしれない。そうであるならば、体育学も、より自覚的に価値論議を立ち上げ、関連知見を渉猟するなかで、とりあえずは、その可能性を多様に探っていくことが求められよう。なぜならば、体育学における価値論議は、依然として重要な学的課題であり、そして依然として未開拓な問題領域であるからである。

4. 註および引用・参考文献一覧

- (1) 哲学事典, 平凡社, 1971, p.224.
- (2) Zeigler, E. (1977) *Physical education and sport philosophy*, Prentice-hall inc., p.34.
- (3) 増渕幸雄 (1994) 教育的価値論の研究, 玉川大学出版部, p.36.
- (4) 増渕幸雄, *ibid.*, p.35.
- (5) 教育思想史学会編 (2000) 教育思想事典, 勁草書房, pp.79-81
- (6) 教育思想史学会, *ibid.*, pp.79-80.
- (7) Spranger, E. の略歴については、次のように纏められている；

まず彼は、1882年6月27日にドイツのベルリン市中南端グロース・リヒターフェルデに生まれ、名門グラウエン・ロースター・ギムナジウムを経て、1900年にベルリン大学に入学する。その当時、世界の学界を風靡していたベルリン大学の数多くの名高い教授陣の中から、特にPaulsen, F. と Dilthey, W. に師事するが、さまざまな経緯から学位論文を Paulsen, F. に提出し、1905年に哲学博士の学位を得る。その後、高等女学校に勤務しながら教授資格論文を執筆し、1909

- 年に Paulsen, F. に提出, 同年 8 月にベルリン大学私講師として哲学と教育学の講義を執り行なう。そして, 1911年にライプツヒヒ大学員外教授, 1920年にベルリン大学教授, 1946年にチュービンゲン大学教授, 1952年に同大学停年退官, 1963年9月18日に81歳にて永眠する。(『村田昇 (1991) シュプランガー, その生涯, 滋賀大学教育学部紀要, 41:21-49.』による.)
- (8) 小笠原道雄 (1974) 現代ドイツ教育学説史研究序説, 福村出版, p.3.
 - (9) 村田昇 (1995) シュプランガーと現代の教育, 玉川大学出版, p.1.
 - (10) 田代尚弘 (1988) シュプランガーの宗教的人間観への一考察, 教育哲学研究, 58:5.
 - (11) Spranger, E. (1934) Vom Wandeldes Lebens und der Werte, Das Innere Reich : Zeitschrift für Dichtung, S.319.
 - (12) 哲学事典, op.cit.,1), p.224.
 - (13) Spranger, E. (1922) Lebensformen, Max Niemeyer, S.302.
 - (14) Spranger, E., a.a.O., 11), S.319.
 - (15) 哲学事典, op.cit., 1), p.224.
 - (16) Spranger, E., a.a.O., 13), S.252.
 - (17) Spranger, E., ditto, S.291.
 - (18) Spranger, E., ditto, S.252.
 - (19) 田代尚弘 (1995) シュプランガーの教育思想の研究, 風間書房, p.254.
 - (20) Spranger, E. (1920) Gedanken über Lerhreibung, Quell & Meyer, S.26.
 - (21) Spranger, E., ditto, S.7.
 - (22) Spranger, E., ditto, S.7.
 - (23) Spranger, E., ditto, S.7.
 - (24) Spranger, E. (1933) Umriss der philosophische pädagogik, Philosophische Pädagogik, Gesammelt Schriften II, Quell & Meyer, S.24.
 - (25) 安藤堯雄 (1936) シュプランゲルに於ける陶冶概念と教育概念の関係 (1), 教育学研究, 4-10:33.
 - (26) Spranger, E., a.a.O., 13), S.21.
 - (27) Spranger, E., ditto, S.53.
 - (28) Spranger, E., ditto, S.211.
 - (29) Spranger, E., ditto, S.42.
 - (30) Spranger, E., a.a.O., 20), S.3.
 - (31) Spranger, E., a.a.O., 13), S.292.
 - (32) Spranger, E. (1949) Die Magie der Seele, J. C. B. Mohr, S.37.
 - (33) Spranger, E., a.a.O., 13), S.283.

- (34) Spranger, E., a,a,O., 13), S.212.
- (35) 神崎英紀 (1978) シュプランガーにおける精神生活の規範性について, 九州大学教育学部紀要, 24: 56.
- (36) Spranger, E., a,a,O, 13), S.340.
- (37) Spranger, E. (1958) Der Geborene Erzieher, Quelle & Meyer, S.25.
- (38) Spranger, E., a,a,O., 13), S.53.
- (39) Spranger, E., ditto, S.268.
- (40) 安藤堯雄, op.cit, 25), p.32.
- (41) Spranger, E., a,a,O., 13), S.340.
- (42) Spranger, E. (1954) Gedanken zur Daseingestaltung, R. Piper & Co Verlag, S.29.
- (43) Spranger, E., a,a,O., 13), S.312.
- (44) Spranger, E. (1951) Der Lehrer als Erzieher zur Freiheit, Gesammelt Schriften II, S. 340.
- (45) Spranger, E., a,a,O., 13), S.298.
- (46) Spranger, E., ditto, S.302.
- (47) Spranger, E. (1950) Die Volksschule in unserer Zeit, Pädagogische Perspektiven, Quelle & Meyer, S. 84.
- (48) 長井和雄 (1973) シュプランガー研究, 以文社, p. 312.
- (49) Spranger, E., a,a,O., 13), S.310.
- (50) Spranger, E., ditto, S.309.
- (51) Spranger, E., ditto, S.242.
- (52) Spranger, E., ditto, S.268.
- (53) Spranger, E., a,a,O., 42), S.40.
- (54) Spranger, E., a,a,O., 13), S.304.
- (55) Spranger, E., a,a,O., 37), S.106.
- (56) Spranger, E., a,a,O., 13), S.309.
- (57) Spranger, E., ditto, S.287.
- (58) これ以降の文中において類出する身体については, 本来, working definition を施す必要があるが, ここでは, 取り敢えず未規定のまま, 即ち, 日常的な言語表現に準じて用いることとしたい。